

筆大書され、クールベの《女と鸚鵡》(図103)もマネの《オランピア》と対比して解釈されてきた。この周辺については評者に別途の私見があり、本書と議論を交わしたい局面ゆえ、以下舌足らずだが略述する。

拙見では、失われた《ヴェヌスとプシケー》(図102)は63年の「ヴィーナスのサロン」の砂糖菓子よろしき仕上げを施した官展派巨匠たちの紛い物の神話画群の軽薄さを糾弾すべく、写真撮影を凌ぐ迫真の皮膚描写を狙いながら構図で失敗した。その挽回を画した《女と鸚鵡》による国家勲章授与を画家が峻拒したのは、思想信条ゆえの事前決定事項。だが本作は次世代のマネの鸚鵡と思わぬ競合を来し、新時代到来からの落伍をも暗示する。補完する《眠り》(図2)の同性愛描写と水着姿の現代ヴィーナス表象たる未完の《ボドスカーフに乗る女》(図129)の先で、アングルへの敵愾心まじりの追悼を込めた《泉》(図126)は水流の源泉としての女性へと回帰する。

私見ではこの60年代の軌跡には、技量の円熟と裏腹の公共展示作戦上の混乱も見逃せず、また「微睡み」の受動性や「泉」の性的隠喩に踏み込む阿部良雄の先行業績への再参照も要請されよう。「狩り」連作の嗜虐性と加虐性との振幅は「海の風景」の寄せては返す波浪にも重なるが、その波に身を委ねる女性像が宿す「自由」や、亡命先の終焉の地、スイスのHelvetia理念との交錯を託した晩年の彫像にまで、本書は探測を伸ばす。終局部はやや書き急ぎが覆えず、立論・分析とも未成熟だが読者をさらなる省察に誘う。パトリシア・マイナルディなどの往年の些か図式的な社会史解釈への依存からの脱却が、将来の課題となるだろう。

く、歴史資料博搜のうえ、当代流行の服飾への繊細な知見を鍵に、画家の意図的な規範から逸脱した描写が当時の公衆に与えた衝撃の程を、精彩に浮き彫りにする。

さらに眠る女性の姿には、フリーエ主義者・ラヴェルダンが説いた理想社会への「夢」との呼応と画家の逸脱ぶりまでが解き明かされ、さらに一見無思想な自然風景描写が社会主義藝術の基礎となる知的地盤まで探られる。

50年代は七月王政瓦解後の第二帝政への移行期だが、《眠る糸紡ぎの女》(図52)に野卑な悪臭を嗅ぎつける批評家の反応の裡に、当時のパリの社会矛盾が逆照射される。美的な規範を侵犯する《剣闘士たち》と肥満体の《水浴の女たち》ともども三幅対よろしくサロン出展した画家の深慮遠謀からは、美醜というフィリター越しに、社会の「良識」への疑念を突きつけるクールベの挑戦姿勢が立証される。

《セーヌ川のお嬢さんたち》(図1)分析では、岸辺の侵入植物の緑地に横たわる娼婦たちのしどけない姿態や不整合な服装から、彼女らの社会階層や日常までもが炙りだされる。その分析を通過すると、一見無垢な風俗画がまったく別のメッセージを訴える挑発画へと変貌を遂げる。さらに、ヨルダースの女性像からの感化が隠し味となる一方、その神話画を下敷きにして描かれたフランドル17世紀市民社会の相貌が、クールベの社会風刺に格好の苗床を提供し、《法話の帰り道》(図83)のカトリック権力への揶揄が、民主主義の理念声明との結託を孕んでいた様相まで透視される。その解説の醍醐味は読者のお愉しみに委ねよう。

60年代は通俗書では1863年の落選者展でのマネ《草上の昼食》の「醜聞」が特

女性像の変遷から社会環境の動態とそこに棹さした写真主義者の振る舞いを際立たす

天王寺谷千裕著『ユスター・ヴクールベと女性表象』(三栄社、2025)への招待

『図書新聞』3693号
2025年6月28日
5面

国際日本文化研究センター／
総合研究大学院大学・名誉教授
稲賀繁美

女性の姿を男性が描くのは須らく男性支配・家父長制の表徴なるべし、との論難が1990年代には支配的言説の一端をなした。かく申す評者は、この文脈で若桑みどり氏との論争に巻き込まれ、今でも反フェミニズムの確信犯として一部で糾弾され続けている。描写対象を受け身の被害者という枠組みに矮小化する一方的決めつけは、かえって倒立した優生思想を招く虞れがある、といった危惧表明は、当時、許されるものではなかった。植民地タヒチで現地の子女を「凌辱」したゴーガンに劣らず、戦闘的な写真主義の騎手として社会主義者から英雄視されたはずの画家クールベもまた、そうした論難の標的たるを免れなかった。

ここに扱う書物は、こうした前世紀の教条を踏まえたうえで、クールベの女性表象へのピンポイントな分析に立脚し、従来の定説や先行研究を見事に塗り替える。その一端は本連載251回にも略述したが、先行業績への周到な目配り、独自の調査に基づく新解釈、サロン出品作の女性像に限定した編年の変遷から画家の企てを三期に分ける構想まで。すべてに卓越した論旨展開で読者を釣り込ませる力量を発揮し、画家の相貌を一変させ、その生涯に新たな鳥瞰を与えている。

1840年代の《ハンモック》(図13)分析では、ヴィクトル・ユゴーの東方趣味の詩想を、都市化による階層分化が進行する世相に生きる現代女性像へと換骨奪胎する、画家の巧緻が解き明かされる。理想化された田園風景が繁茂するなかで、あえて悪趣味とみえる描写を逆用する画家は、容姿の描写にブラックスマンの版画やシャセリオーの聖書画から巧妙に我田引水する、そのしたたかさも、説得力ある多数の図像比較から立証される。同時代の詩・小説への目配りも抜かりな